

# 東海道五十三次

## てくてく歩く日帰り一人旅

太田康直

### 東海道五十三次 一知られざる穴場— その⑧

袋井宿を出て木原一里塚を通り過ぎ、さらに進むと磐田市に入る。実はそこへ辿り着く前に、全行程中最も道に迷った恐怖の時間が待ち受けている。途中「旧東海道」の案内板がありその直後、坂の上り口で道が2つに分かれていて左に「江戸の古道」、右に「大正の道」の石の道標が立っていた。左は坂道、右は平行して走っている国道に今にも飲み込まれ（合流）そうな平坦な道。当然のごとく左の坂道を上った揚句、迷路から抜け出して結局元の位置に戻り着いた。その間実に、2時間半のロス。その軌跡をいちいち再現はすまい。右の「大正の道」を選ぶのが正解で、すぐに1号線に合流できた。南無三。

心身ともに疲れ切って歩いて行くうちに右側に、「遠州鈴ヶ森の刑場跡」の大きな標柱が見えて来る。日本駄右衛門の処刑場跡地である。その先を進み、やっとの思いで「遠州見付宿木戸跡」の標識まで辿り着いた。ここが見付宿（28番目）の東木戸。



（歌川広重 見附宿）

そもそも宿場の出入り口の名称（普通名詞）は宿場ごとに異なっていて、「江戸方見付・上方見付」、「東木戸・西木戸」、「江戸口門・京口門」さらには「東棒鼻・西棒鼻」という呼び方の宿場まである。ここ「見付宿」の「見付」だけは正真正銘の固有名詞。西から歩いて来た旅人がここで始めて富士を見付けるのでついた名。現在のジュピロ磐田の本拠地磐田市である。遠州見付宿から三州御油宿までは姫街道が通っていて、その入口を示す道標もあった。これは浜名湖の今切の渡しと、新居の関所を嫌った女性たちが通った迂回路である。

次いで天竜川に差しかかる。暴れ天竜と恐れられたこの川、江戸時代は舟渡りであったが、明治7年に始めて橋が架けられた由、「天竜橋跡」の碑が建つ。説明書きによれば、舟を並べて繋ぎ止め、上に板を並べただけの簡単な代物であった。現在は旧東海道と、隣接する1号線の何れの橋にも歩道がなく、全長263メートルを歩いて渡ることは不可能。磐田の観光案内所で教わった通り、旧東海道の方にしか走っていない路線バスを30分待って、磐田側の長森バス停から浜松側の中野町バス停まで橋の上の1区間だけ、利用した。

バスを降りて堤防の上を少し下流の方に歩くと、浜松側にも「舟橋跡」と「天竜川木橋跡」の標柱が2本並んで建っていた。その先で堤防を下りて六所神社の前を行くのが東海道。少し先に、「軽便鉄道軌道跡」という珍しい道標が建っていた。高札場跡を過ぎると、大きな旧家の建物の前が出る。金原明善の生家で、向い側に記念館もある。金原明善（1832～1923）は「あばれ天竜」の治水事業に生涯を賭け、全私財を投げ打った篤志家。



（歌川広重 浜松宿）

浜松宿（29番目）に入ってガイドブックのイラスト図に騙され田町交差点で左折したのが運の尽きで、1時間ほどロスをした。実際は田町の信

号から3つ先の連尺という交差点を左折すると左右の歩道に、浜松宿佐藤本陣跡、夢舞台の道標、浜松宿高札場跡、浜松宿杉浦本陣跡、浜松宿川口本陣跡、浜松宿梅屋本陣跡の6つの遺跡が立ち並ぶ。浜松宿には本陣だけで6軒あり、箱根宿と並ぶ最大規模の宿場であったが、戦災で根こそぎやられ往時の面影は何一つ残っていない。ちなみに上述の梅屋本陣の婿養子であったのが、国学者加茂真淵。生家は近くの加茂神社。先の連尺交差点を逆に右折すると、浜松城に至る。

JR 舞阪駅に近い旧東海道の遺跡と言えば、全長700メートルに及ぶ堂々たる規模の松並木。松並木の左側に広重の「東海道五十三次」のすべての絵の銅版が石に嵌め込まれて並んでる。少し進んで舞阪宿（30番目）の入口に、「見付石垣」の一部と「舞阪一里塚跡」の石柱が残っていた。続いて道の右側に「伝左衛門本陣跡」と「徳右衛門本陣跡」があり、左側に「舞阪宿脇本陣」の遺構があった。本陣の遺構は二川宿と草津宿にあるが、脇本陣で残っているのは、五十三次中ここだけ。



（歌川広重 舞阪宿）

脇本陣は普段は旅籠を営み、参勤交代等で本陣が混み合っている時のみ本陣の代行をする。格式が上で、庶民を泊めることの出来ない本陣より経営が楽で、事実この脇本陣は明治に入ってから

も引き続き旅館業を営んでいた。さらに明治末から10年ほどは役場になり、続いて医院にもなっていたので、破壊を免れた由。入場無料で、留守番役は教育委員会の職員のおばさん。親切に説明をして下さった。

この少し先で道は浜名湖に突き当たる。今切の渡しである。「今切」というのは淡水湖であった浜名湖が、明応8年(1499)の大地震で陸が切れ外海とつながったことからの命名。往来から水際までの石畳の船着き場を雁木がんげと言い、北(諸侯用)、中(武士用)、南(庶民と荷物用)と3ヶ所あった。今は、「東海道舞阪宿渡船場跡北雁木」として当時の遺構が保存されている。ここから関所のある次の新居宿(31番目)までは海上一里の船旅。航路が残っていない現在はJR弁天島駅～新居町駅の1区間は鉄道の旅。青春18切符が便利。

江戸時代、全国の街道に53の関所が設けられていた。その内東海道には箱根の関所とここ新居の関所の2ヶ所。全国53関所の内、現存するのはこの新居関所の建物のみ。ということで國の特別史跡に指定されている。当時は新居側の渡船場も関所構内に設けられ、今切の渡しの業務は新居側が担当。舞阪側には何のおこぼれ、つまり財源も入らなかった由。



関所の入口には炭太祇の句碑「木戸しまる音やあら井の夕千鳥」が建ち、お隣りには新居関所資料館も。関所近くの住宅地の中に「船囲い場跡」という、うっかり見落としてしまいそうな標柱が1本建っている。往時にはここに120隻の渡船が配置されていた、と案内板にあった。関所内にあった渡船場も大正期に埋め立てられた由。

この関所で特に厳しかったのは、いわゆる「入り鉄砲に出女でおんな」の監視。謀反を起こす武器の江戸への流入と、幕府の人質にされていた諸大名の妻子が、国許へ逃げ帰るのを防ぐための監視である。特に女性に対する本人確認は厳格を極めていたとのこと。そのため多くの女性は、荒波の難所今切の渡しと女改めの厳しい新居の関所を避けて、湖北を回る道を歩いた。見付宿～御油宿の姫街道である。ついでながら「今切」という縁起の悪い名を嫌って縁談の決まっている女性や嫁入り道具の運搬にはこの姫街道を選んだとのこと。

さて新居の関所の前の道を西に進むとほどなくして突き当たる。この辺りが宿場の中心地で、疋田弥五郎本陣跡、飯田武兵衛本陣跡、疋田八郎兵衛本陣跡が道の左右にある。突き当たりの道を直角に左折(南下)するのが旧東海道。少し行くと一里塚跡、その先に寄馬跡がある。寄馬とは、宿場に準備された人足と馬の溜まり場のこと。さらにその先、新居宿と次の白須賀宿との中間辺りに立場跡がある。立場とは旅人、人足、駕籠かきなどの休息する施設のことである。

